１　研究主題

道徳教育の「４つの視点」を基盤とした学校経営の一考察

～「描く・示す・繋ぐ」の３段階を踏まえた管理職のリーダーシップを通して～

熊本市立帯山西小学校校長　荒木　隆伸

２　研究主題について

（１）　「道徳教育の『４つの視点』を基盤とした学校経営」とは

本校の学校教育目標は「豊かな心で主体的に活動し、みんながわくわくする学校創り」である。ここには、これから様々なことに出合いながら成長していく子供たちに、「自分の人生を自分自身で豊かに創造できる力を育てたい。」という願いがある。そしてそのために、子供の心と行動の力を育む道徳教育が、学校の隅々まで当たり前に流れ、学校の主役である子供たちと職員、そして保護者が学校目標実現に向かって一体となりながらわくわくする「学校文化」を醸成したいと願っている。学校教育に関わる様々な取組を、「道徳教育の『４つの視点』」を道徳科の４つの視点を象徴的なものにし、学校のマスコットキャラクター「帯西レンジャー」に、４つの心（表１）を価値付けた。

【表１　帯西レンジャーに意味付けした「４つの心」】

A:主として自分自身に関すること	B:主として人との関わりに関すること	C:主として集団や社会との関わりに関すること	D:主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること

令和４年度の４月の最初の会議で職員に説明し、始業式に子供たちに示した（資料①）。これまで、多くの学校で、学校教育目標が子供にも教師にもあまり意識されずに、日々の教育活動が行われていることが多いように感じられた。そこには、日々の教育活動と学校教育目標のつながりがわかりにくいということが原因の一つとして考えられる。そこで、学校教育目標が教師にも子供にも意識され、日々の教育活動が学校教育目標の実現に向かうようにするために、学校教育目標実現のための「努力目標」を、「道徳科の４つの視点」で具体化して示すことにした（表２）。

表２「学校教育目標・努力目標」

【学校教育目標】

豊かな心で主体的に活動し、みんなが「わくわく」する学校創り

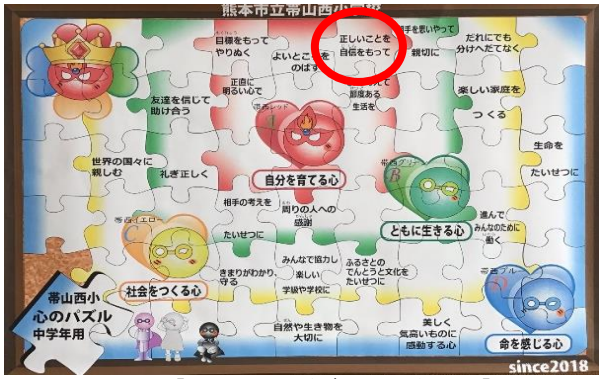
～子供たちが帯西レンジャーと共に活躍する学校～

【努力目標】

目標をもって努力し【A】、仲間とともに高め合い【B】、

みんなのために進んで働き【C】、よりよく生きていこうとする【D】子供の育成

さらに、「４つの心」を生かしつつ、道徳科の内容項目をパズルのピースに置き換えて示した、「心のパズル」の活用を図っている。「心のパズル」（図１）は、４つの視点をA⇒B⇒C⇒Dの順に同心円状で表し、小学校低・中・高学年から、中学校まで、系統性を踏まえている。例えば「A：主として自分自身に関すること」の「善悪の判断、自律、自由と責任」の内容項目を表すピースは、小学校低学年では「よいことわるいこと」、中学年では「正しいことを自信をもって」、高学年では「しっかり考えて責任ある行動を」、中学校では「自ら判断・行動し結果に責任をもつ」とし、子供たちが諳んじやすいように表記している（資料②）。



【図１　心のパズル（中学年用）】

（２）　「『描く・示す・繋ぐ』の３段階を踏まえた管理職のリーダーシップ」とは

学校経営を全職員で組織的に取り組んでいくためには、校長の明確なプランと適切なリーダーシップが欠かせない。そこで、「描く」（視点１：学校教育目標実現のための構図を描く）、「示す」（視点２：道徳教育充実のための手立てを示す）、「繋ぐ」（視点３：道徳教育と子供・保護者・地域を繋ぐ）という３段階を通して、校長が適切にリーダーシップを発揮することにより、全職員での共通理解・共通実践の充実を目指した。さらに、子供・保護者・地域も巻き込むことで、道徳教育を柱とした学校経営の充実を図った。

３　研究の構想図と研究の視点・内容

研究の構想図を図２で、研究の視点・内容を表３で示す。

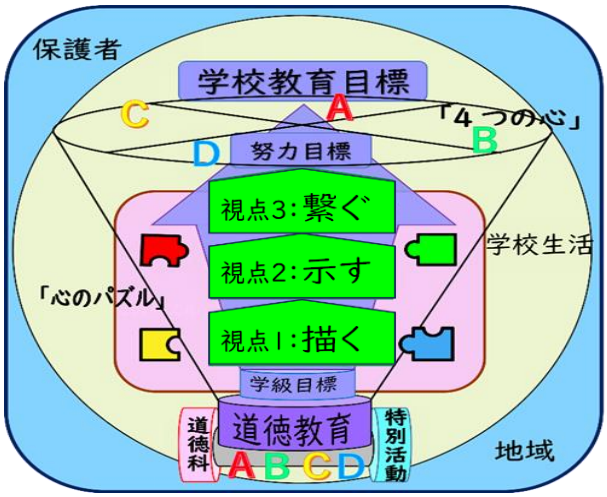


図２「研究の構想図」

表３「研究の視点・内容」

視点１：学校教育目標実現のための構図を<u>描く</u>
①学校教育目標と努力目標、学級目標の関連
②学級目標の設定の仕方
③学級目標を生かす
視点２：道徳教育充実のための手立てを<u>示す</u>
①「道徳科」の授業改善のポイントを示す
②「学級活動」の授業改善のポイントを示す
③校内研修のシステムを示す
視点３：道徳教育と子供・保護者・地域を<u>繋ぐ</u>
①道徳の「４つの視点」を「４つの心」へ
②「心のパズル」で内容項目と子供を繋ぐ
③道徳教育と保護者・地域と繋ぐ

４　研究の実際

（１）視点１：学校教育目標実現のための構図を描く

①　学校教育目標と努力目標、学級目標の関連

道徳教育を柱とした学校経営を推進するために、まず重要視したことは、各学級でつくる「学級目標」が確実に「学校教育目標」の実現に向かうようにするのはどうすればよいかということである。そこで、道徳科の４つの視点をもとに、「学級目標」が「努力目標」の達成へつながり、そのことが「学校教育目標」の実現に向かうような構図を明確に描くことが大切だと第一回目の校内研修で示した（図３）。学級目標は、担任が目指す学級像を示し、子供たちが自分の目標（めあて）に向かって実践することで大きな成長に繋がることをしっかり踏まえて、共通理解を図り、共通実践に繋げた。

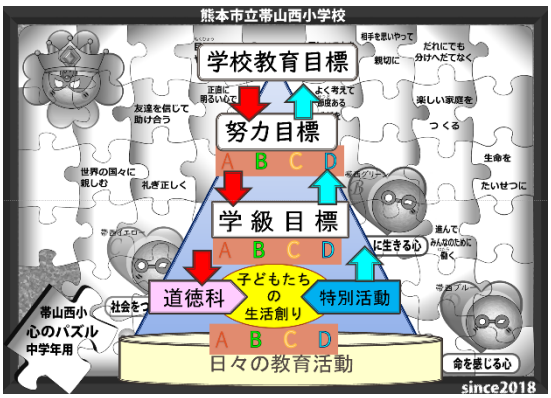


図３「学校教育目標と学級目標の関係」

②　学級目標の設定の仕方

学級目標に「４つの心」を取り入れることで、全ての学級が学校教育目標の具現化に向けて取り組んだ。４月の職員会議で、校長が学校教育目標を提示し、その後、各学級で学級活動内容（３）での学級目標の作り方を動画で示した（図４）。QR コードは、職員室に掲示し、いつでもタブレットで視聴できるようにした。この学級目標を基に、子供が各自で個人目標を決め、全ての学校生活で意識することで、常に「『帯西レンジャー』のどの心が伸びたのか」を拠り所として活動を振り返ることができた。

【図４　動画 QR コード】

③　描いた実際の構図

学級目標の中にも４つの視点を設定したことにより、今年度のスタート時には、全学級が学校教育目標の実現に向けて方向性を揃えるための構図が完成した（図５）。また、学級目標は学級旗に表し、教室に掲示している。実際に子供たちが描いた手作りの学級旗は、学校教育目標に向かうためのシンボルとして各教室に掲示されているばかりか、運動会や音楽会、各学級の集会の時に掲揚され、学級それぞれの目標に近付くために活用されている。

図５「学級旗の一例」

（２）視点２：道徳教育充実のための手立てを示す

①　「道徳科」「学級活動」の授業改善のポイントを示す

校長が校内研修の中で道徳科・学級活動それぞれに、「焦点化」と「共有化」を共通のキーワードとして、授業改善のポイントを示した。

道徳科においては、教師のねらいとする価値と、子供の学びがずれてしまうことは少なくない。この原因の一つに教師のねらいが曖昧であったこと、子供自身が何を学んだか明確につかんでいないことが考えられる。

学級活動内容において、合意形成、意思決定に至らない場合がある。その要因として、「何のために話し合うのか」と「身に付けさせたい態度」などが焦点化ができていないこと、そして焦点化したことのイメージの「共有化」ができていないことが挙げられる。そこで、道徳科においては表４、そして学級活動においては表５のような「焦点化」と「共有化」を大切にした授業を行っていくことを示した。

②　授業改善の視点を生かした授業実践を行う

授業改善のポイントを「共有化」と「焦点化」に絞って、全担任に授業実践するよう伝え、全員が授業実践を行い、授業改善に努めている。

（３）視点３：道徳教育と子供・保護者・地域を繋ぐ

①　子供たちが活躍するカリキュラム作り

本校では水曜日を午前中５時間（４０分授業）にして、給食・帰りの会終了後に５時間授業分の２５分間（５時間×５分間＝２５分間）を「わくわくタイム」としてたてわり班の時間としている（図６）。

【図６「子供たちが活躍するカリキュラム作り」】

その時間が終わると６時間目が始まるが、６時間目は委員会活動かクラブ活動の時間に設定し、水曜日の午後は、子供たちが活躍する時間に設定している。

②　学校だよりで、学校と保護者・地域を繋ぐ

学校だより（図７　QR コードを読み込むと、学校便りの HP に繋がる）を毎日配信し、子供たちの活躍を掲載している。保護者にはメール配信し、地域にはコミュニティーの新聞に QR コードを示している。これによって、保護者、地域の方々も本校の取り組みを理解し、「４つの心」で子供たちを価値付けすることができるようになってきた。

【図７「学校だより QR コード」】

５　研究の成果と課題

（１）研究の成果

視点１：学校教育目標実現のための構図を**描く**

本研究が、本校職員の意識や行動にどのような変容を与えたかを経年調査比較した。図８は、「『４つの心』を意識して教育活動に取組むことができたか」というアンケートの経年比較である。昨年度の平均３１％に対し、今年度は平均７５％と大きな伸びを示した。

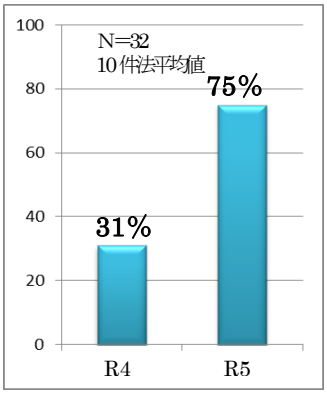


図８「『４つの心』を意識して教育活動に取組むことができたか」

視点２：道徳教育充実のための手立てを**示す**

道徳科と学級活動の授業実践の成果をアンケートで問い、経年比較したものが図９・10 である。その変容の理由として、職員は表４のように答えており、職員の授業改善に繋がっていることが窺える。

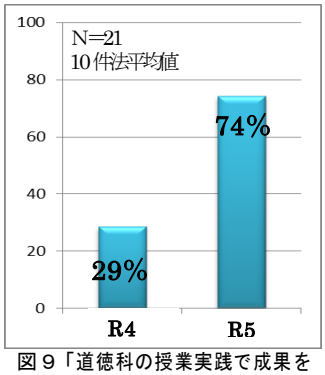


図９「道徳科の授業実践で成果を感じたことはあるか」

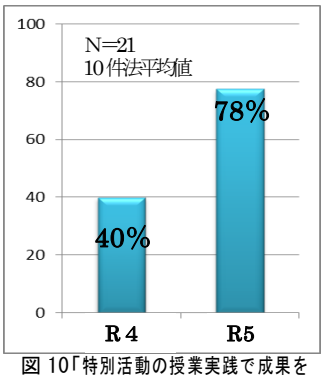


図 10「特別活動の授業実践で成果を感じたことはあるか。」

表４「変容の理由」

道徳科

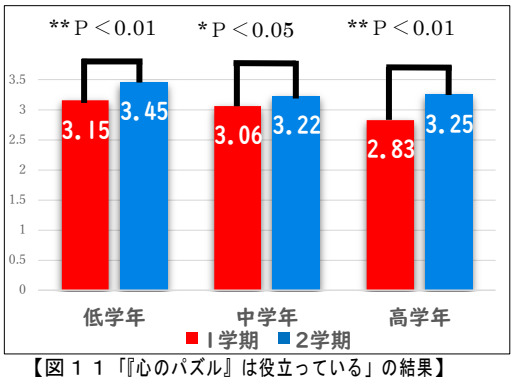
教科書の読み取りに陥ることが多々あったが、気付かせたい心に向けて少しずつ発問も焦点化できるようになった。／「焦点化」「共有化」を大切にすることで、授業の軸がぶれないことを実感し、授業を組み立てるうえで大切にしているから。

学級活動

「焦点化」「共有化」がはっきりできていると子供たちが同じ方向に向かって動き出すということを研究授業でも自分の学級でも強く感じた。／子供たち自ら考えて行動し、変容が目に見えて明らかになってきたから。

視点３：道徳教育と子供・保護者・地域を**繋ぐ**

本研究が、子供たちの意識や行動にどのような変容を与えたのか、質問紙を活用し、年度当初と 11 月で調査・比較・分析をした。図 11 は「『心のパズル』は自分の生活や勉強をするときに、役に立っています。」という設問項目に対する結果である。２学期末は明らかな伸びを示した。その変容の理由を子供たちは表５のように答えた。「４つの心」を全校で活用したことが大きいと考える。



【図１１「『心のパズル』は役立っている」の結果】

【表 22　変容の理由】

集会後に「４つの心」の何が伸びたかを代表の人が発表するときに，自分はどうかと考えることができるようになったから。／「心のパズル」を身近に考えるようになったから。／集会や道徳など授業で使っているうちに，活動しているときに「４つの心」のどこが伸びているかを考えながら活動しているから。／集会や行事を「４つの心」で振り返ったり，（「４つの心」に沿って立てられた）学級目標や児童会目標で意識したりすることが多いから。児童会目標や学級目標に「４つの心」を入れたから。／どこが伸びたかを振り返ることで，またさらにワンランクアップできるし，これからどうやって取り組んでいくかも考えられるから。

学校評価アンケートを使った、保護者の意識の経年変化に検定をかけて分析したものが、図 12 である。本校の道徳教育の取組を、「４つの心」で、子供、保護者、地域を繋いでいったことで、「学校は、家庭に学校の教育方針や教育目標をわかりやすく示していると思いますか。」の設問項目において、有意差が出たと思われる。

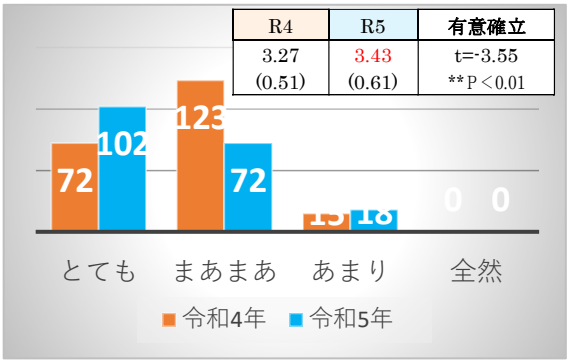


図 12「学校は、家庭に学校の教育方針や教育目標をわかりやすく示していると思いますか。」

（２）研究の課題

授業づくりのための「焦点化」「共有化」について、理解が深まってきているが、他学年の実践内容を職員一人一人が把握する情報交換の場が必要である。